

第51回 ー北九州周遊ー その2 吉野ヶ里と岩戸山古墳

周遊の第2日目も天候は依然芳しくなく、朝は雨模様であった。宿を出て国道385号を北へ、筑後川を渡ってさらに北上すると、背振山地の南の佐賀県神埼町と三田川町にまたがる広大な丘陵上に吉野ヶ里遺跡が広がっている。幸いにして、到着の頃には雨は止み、曇りとなった。弥生時代前期にこの丘陵帯に分散的に「ムラ」が誕生する。やがて、南側の一面に環濠を持った集落が出現し、「ムラ」から「クニ」の中心集落へと発展する兆しが見えてくる。弥生中期には丘陵を一周する大きな外環濠が掘られ、首長を葬る「墳丘墓」や「甕棺墓列」も見られるようになる。集落の発展と共に、防御が厳重になっていることは「争い」が激しくなってきたことをうかがわせる。弥生後期となると国内最大級の環濠集落へと発展し、大規模なV字形の外環濠によって囲まれ、更に特別な空間である二つの内郭を持つようになり、内郭には祭殿や物見櫓などの大型建物が登場する吉野ヶ里の最盛期にあたる。このように重層的に発掘された遺跡は弥生時代後期後半（紀元3世紀頃）の最盛期を復元対象時期と定め、これまでの発掘調査をもとに、その復元整備が行われている。



●写真：吉野ヶ里エントランス

さて、このような弥生時代の巨大化した環濠集落、防御機能が強化されて城塞化し、神殿・祭殿・楼閣のようなランドマーク的建物が建設された集落は都市なのであろうか？集落の中では手工業生産とその分業が始まり、遠隔地との原材料・製品の交易もおこなわれ、集落民のなかに階層が生まれ、首長の権力が発生するが、都市としての要素は生まれつつあるとしても微弱である。何と言っても吉野ヶ里も唐古・鍵遺跡（奈良）も、また池上・曾根遺跡（大阪）も農民が中心で農業を基本的生業としていた。大量の農具が出土するところから云っても、巨大な環濠集落といえども、都市とは云えず巨大な農業集落の範疇に留まっていたと考えられる。

整備された歴史公園の広さは37ヘクタールと云う。幸い巡回バスが20分ごとに出ているので、有効利用することにする。バスはまず「下戸（一般人）」の居住地域で、竪穴住居や高床倉庫など27棟の建物が復元されている「南のムラ」の外郭を巡り、北端の「古代植物館」まで行くが、戻って北墳丘墓の下で降車する。環濠に沿った小道を登っていくと、覆屋で保護された北墳丘墓の展示施設がある。墳丘は南北約40



m、東西約27m以上の長方形で現在は高さ2.5mであるが元来は4.5m以上であったと推定されている。甕棺が14基埋葬されており、歴代の首長など高い身分の人たちが被葬者と考えられる。すべて大型のものであり埋葬の密度は低い。墳丘の築造は、当時としては高度な盛土・版築技法が用いられており、大陸の技術知識を持つ人が関わっていたか可能性がある。副葬品は銅剣や管玉、絹などが出土している。

敷地北端の東側には長く続く甕棺墓列があり、又、北内郭の北側にも甕棺墓列がある。これらの甕棺墓列から、頭骨(首)のない人骨や鎌を射こまれた人骨が見いだされている。北部九州、特に玄界灘沿岸地域では弥生時代前期の早い時期の殺傷人骨が発見されるが、中期以降は戦争がさらに凄惨さを極めた。福岡県内では額を割られた人骨、石や青銅の鎌や剣の切っ先を体内に残して葬られた人骨が多数出土している。この様な耕地を争う戦争を繰り返して、共同体間の争いに決着をつけ、クニの統合が行われていったのである。



●写真：楼閣・吉野ヶ里の全景



●写真：環濠

北墳丘墓の南側には、北内郭がある。ここは集落の中の最も神聖な場所であり、巨大な祭殿を始め、9棟の建物が復元されている。さらにその南西の南内郭には物見櫓4棟や王たちの家、煮炊き屋など王たちの居住空間を含め20棟の建物が復元されている。物見の一つに上り周囲を眺めてみると、結構、視界も視距離もあり、南郭四隅の櫓で周辺の監視警戒は十分であったと思われるが、森浩一氏はさらに高い20メートルの高さの物見を想定している。内郭をでて「ひみかのみち」を下がり、環濠を西に渡るとメインエントランス（東口）である。食堂で名物と称する「吉野ヶ里ソーメン」を食べる、大変美味であり、このあたりは水が良いという特長もあることを理解した。

東背振から長崎自動車道に乗り、昨日と同様に鳥栖J Tで九州自動車道に入り、八女古墳群の岩戸山古墳を目指した。「筑後国風土記」逸文に記述されている位置関係から、この古墳は筑紫君磐井の墓と考えられている。527～528年、大和王権の継体天皇と北部九州の首長磐井が激突した「磐井の乱」は古墳時代最大の内戦と云われている。しかしそれは継体の晩年の出来事であり、磐井が近江臣毛野に「昔は吾が伴として、肩摩り肘觸りつつ、共器（おなじけ）にして同食（ものくら）引き」と語ったとあるように、磐井は継体大王とも友好関係にあったと考えられる。岩戸山古墳はそのような時期に磐井が自らのために築いた寿墓で、尾張連草加の墓とされる断夫山古墳と比肩する規模の前方後円墳である。磐井をはじめ北九州の豪族たちは、弥生時代から海を制し、中国や朝鮮半島と交流を持っていた。百済と深い関係を持っていた大和王権とは異なり、磐井らには新羅との独自の交流ルートがあった。そのあたりの国際関係が内戦の原因となつたとされている。

岩戸山古墳は全長約135m、周堤・周濠を含めた全長は約170mで、古墳の北側に多種多様な石人、石馬（石製表飾）が樹立しているのが特徴である。これらの表飾は盟主に敬意を表するため会盟地域の各所から搬入されたものである。古墳の東北には岩戸山古墳歴史文化交流館（八女市）が建てられており、展示の内容は郷土の英雄「筑紫君磐井」を大いに顕彰しようという微笑ましいものであった。2016年には継体の真の墓であるとされる今城塚古墳に隣接の今城塚古代歴史館（高槻市）で特別展「継体大王と筑紫君磐井」が開かれた。展示の目玉は岩戸山出土の力士や武人、鶏、縦、飾太刀などの石製表飾の破片と今城塚出土の形象埴輪の比較であった。岩戸山古墳は全長約181mの今城塚古墳と比較すると一回り小さいが、この同時代の両古墳はともに国史跡に指定されている。



●写真：岩戸山古墳・石人

写真をご提供頂いた吉本吉彦氏に感謝申し上げます。

（岡野 実）

- 文献 1) 吉野ヶ里遺跡展 1989
 2) いわいの郷 八女市岩戸山歴史文化交流館